

---

 卷頭言

 現代社会と貧困——人間福祉研究の課題として
 

---

 京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫
 

---

ちょうど100年以上前のことではあるが、1916（大正5）年9月11日から12月26日まで、『大阪朝日新聞』は河上肇の「貧乏物語」を連載し、翌年秋、これは一冊の著『貧乏物語』（1917）として刊行されることとなった。これを上梓するにあたって、河上は「序」で「人は麵麩のみにて生くものにあらず、されどまた麵麩なくして人は生くものにあらずというが、この物語の全体を貫く著者の精神の一つである」と述べている。そして河上は「いかに多数の人が貧乏しているのか」「なぜに多数の人が貧乏しているのか」「いかにして貧乏を根治しうべきか」と問う。この「現状」と「原因」、そして「解決方法」を問うということは、社会福祉学の常識ともなっている。加えて河上は富と生活、人生の目的といった人生の道も説いた。河上は後に『第二貧乏物語』（1930）を刊行するが、先に出された『貧乏物語』は彼自身にとって経済学として成熟していない所があるからこそ、逆にみずみずしい「貧困問題」への彼の切実な思いが看取される。その後、貧困は戦前においても、様々な様相を以て現在にまで続いてきた。

もう一冊、歴史を振り返っておこう。19世紀末、留岡幸助によって刊行された『慈善問題』（1898）である。この著は近代慈善事業の黎明期に刊行され、日本の社会福祉理論史からも高く評価されるものである。その内容は「自序」に始まり、「慈善家の本領」「慈善家の資格」「慈善家の

見識」「慈善家の種類」「慈善の本源」と続き、現在でいうと社会福祉学原論や概論に相当するものである。留岡はこの著作で、「貧富の懸隔」「乱麻的社会」を救済する方策として「慈善事業」や「慈善家」を位置付け、「学術的慈善事業」というキーワードを提唱した。そしてその基盤にキリスト教を置き、慈善の原理的な把握の方法や慈善の方法や分野を論じ、来たるべき20世紀に於ける日本の方向性を示した。

また、留岡は日露戦争の頃より二宮尊徳の報徳教に関心を抱くようになる。そこにはキリスト教（宗教）が日本の社会において生きた活動を行っていないという批判から発せられている。そしてキリスト者留岡をして「キリスト教は西洋臭い」とも表現させた。留岡は「洋服は英独仏に於けるも、将た亦我邦に於けるも、等しく洋服に相違なきも、彼国人に適せるもの必ずしも我国人に適せりとはいふ可らず。要は其洋服を我国民の身長に適へて造るに在り」（『留岡幸助著作集』第2巻、306頁）と、日本人に適合した土着の思想を唱える。そして尊徳をとおしてジョン・ラスキンにも傾倒し、二人に「経済と道徳」という視点の共通項を見出す。留岡の発想には内村鑑三の『代表的日本人』を想起させるものである。

戦後の社会福祉学の碩学岡村重夫は社会福祉を考えて行く時、「民俗学」という重要な学問的遺産へのアプローチを重視したように、公的な「見

える福祉」だけでなく、民衆の相互扶助の実態について目を配っていく必要もある。最近、木下光生は日本の近世の村の貧困を描き、現代社会の「生活困窮者」との関係でとらえ直すという意欲的な研究をしている（『貧困と自己責任の近世日本史』2017）。そこには近世社会の貧困とその村でのせめぎ合いが論じられ、現在の「大きな政府」と「小さな政府」との関係も当時から存在した。またテツオ・ナジタも『相互扶助の経済』（2015）の中で、報徳社や講といった民衆の相互扶助組織の実態を評価している。重要なのは岡村が指摘する「民俗としての福祉こそが基底となって、その上に社会福祉政策や社会福祉文化が消長する」（「福祉と風土」『地域福祉』121号）という根源的な視点であり、社会の中で培われた伝統的な生活風土への注目である。今、このグローバル社会において、まさに「グローバルな視点」が要求される時代でもある。

最初に河上肇の貧乏物語が刊行されて100年と記したが、今年はまだ一つ「ロシア革命」100年目の節目の年でもある。当時の大正デモクラシーの高揚もこの革命が後押しもした。ロシアに初めて社会主義国が誕生し、その後東欧諸国、中国やキューバ等でも誕生したが、1989年のベルリンの壁の崩壊後、いわゆる「歴史の終焉」とも称され、急速に社会主義の影響は低下した。カール・R・ポパーは『開かれた社会とその敵』（1950）『歴史主義の貧困』（1957）等の著作で、急進的な社会主義、とりわけマルクス主義に対して否を唱えた。そして彼は社会工学を提起し、「ユートピア社会工学」と「ピースミール社会工学」の二つを挙げる（『開かれた社会とその敵』第一部の9章、10章等参照）。換言すれば急進的な革命的発想と漸進的な社会改良的方法との課題でもある。理想的な社会を実現するために本質的改革を目指す方法と、一方で現実問題に重きを置き、早期の解決を重視した政策支援策との二つに分かれる。おし

なべて社会福祉政策やサービスは「ピースミール社会工学」として社会改良思想や即効的な問題解決を志向してきた。

我々が学問として福祉、人間、社会を研究するとき、現実をしっかりと直視しながら、福祉や援助の方法を考えていくことが必要であろう。そこにはどうしても科学、研究者としての姿勢が常に問われることはいうまでもない。人類が誕生して以来、人間は日々の生活を営む。その生活が営まれながら人間はより良き社会を求めて歴史を作ってきた。まさに生存とその福祉の歴史であった。その時代時代において生活や生存の様相、その矛盾があり、人々はそれと格闘してきた。換言すれば、各時代において「福祉制度」が存在したのである。そしてそれにむかって人々は智慧を働かせながら、対策を講じて生き伸び、歴史を形成してきた。現代社会の課題は様々な「貧困」を通して表出している。貧困は経済的なものだけではなく、精神的なものを含め種々の現代社会の矛盾を表す鑑ともなっている。

マザー・テレサがアメリカや日本を訪れたとき、彼女は人間の物質的な貧困以上に、現代社会は「孤独」という、まさに一見豊かに見える社会の「影」を指摘した。「2020年問題」「2025年問題」とも言われるように日本も今後ますます、高齢者の割合が高くなる。少子化や人口問題と付随して様々な課題が山積していく。人間の幸福は時代と比例するものでもない。むしろ現代社会はウルリヒ・ベックやパウマンらが指摘している「リスク社会」（危機社会）なのである。改めて「現代」を問い、「人間」と「福祉」、そして「社会」の関係問い、この「人間福祉」研究の意味を問うていく必要がある。課題に向けての本質追究とソリューションへのアプローチは我々の不断の研究義務でもある。節目の10巻目の刊行を迎え、この研究誌がさらなるその発条になればと願わずにはおれない。